

構造を闡明し、存在を把握する

——『いき』の構造』の存在論——

織田和明

はじめに

——『いき』の構造』の存在論がなぜ課題となるのか——

九鬼周造（一八八八—一九四二）が『いき』の構造』を出版したのは一九三〇年のことである。『いき』の構造』の辞書的な紹介を行うとすれば、「ヨーロッパで習得した当時の最新の哲学を用いて伝統的な日本の感性である「いき」の構造を明らかにした九鬼周造最大のヒット作」となるだろう。『いき』の構造』で用いられた文化的な概念の構造を明らかにするという方法は多くの研究者によって模範とすべきものとみなされ、その結果、土井健郎の『甘え』の構造』のように、『○○』の構造』というタイトルの本が現在にいたるまで脈々と出版され続けている。これらの『○○』の構造』が『いき』の構造』のスタイルを必ずしも踏襲しているわけではないが、『いき』

の構造』の分析方法を評価する人が多くいることは確かである。しかしその九鬼が『いき』の構造』で用いた方法を支える哲学的な基礎、つまり『いき』の構造』の存在論がどのようなものであるかという点になると、筆者にはこれまで十分に論じられてこなかったように思われる。

『いき』の構造』がマルティン・ハイデガー（一八八九—一九七六）の解釈学的現象学の影響下で執筆されていることはいくつもの先行研究が指摘している²。先行研究は、九鬼は当初はフッサール現象学をベースにして本質直観による「いき」の分析を試みていたが、ハイデガーの解釈学的現象学を知ったのちに、エトムント・フッサール（一八五九—一九三八）の現象学に由来する「本質」をすべて別の語に置き換えてハイデガーに傾倒した議論を行ったと論じている。先行研究は、もちろん九鬼の思索の一側面を明らかにしているが、それだけではすべて

を説明できないように思われる。「いき」の構造』には、先行研究が提示した構図よりももう一段奥があるのではないだろうか。

本論文では「いき」の構造』とその準備稿である「いき」の本質』の分析を通じて「いき」の構造』の存在論を明らかにする。そしてその結果を基に「いき」の構造』以降の九鬼の哲学の存在論の深化の道筋を示す。まず次節では「いき」の構造』の存在論の概略を確認しておきたい。

一 「いき」の構造』の存在論

—「意味の存在問題」—

「いき」の構造』の「序」は、ごく短い文章であるが、「いき」の構造』における九鬼の哲学的な立ち位置をはっきりと示している。

この書は雑誌『思想』第九十二号および第九十三号（昭和五年一月号および二月号）所載の論文に修補を加えたものである。

生きた哲学は現実を理解し得るものでなくてはならぬ。我々は「いき」という現象のあることを知っている。然らばこの現象は如何なる構造をもっているか。「いき」とは畢竟わが民族に独自の「生き」かたの一つではあるまいか。現実を有りの儘に把握することが、また、味得ざるべき体験を論理的に言表することが、この書の追う課題である。

(一、三)

『いき』の構造』の目的は「生きた哲学」によって現実／体験を把握／理解し、論理的に言表することである。この目的を達成するために、民族に独自の「生き方」であり、既知の現象である「いき」を研究し、その構造を明らかにする。これが「いき」の構造』の基本方針である。ではなぜこのような方針を九鬼は定めたのか、それを理解するためには「一 序説」の冒頭で論じられている「意味の存在問題」を確認しなければならぬ。

「一 序説」では「いき」のステータスが追加され、それは「現象」だけではなく「存在」でもあるとされる。それゆえ序説では『いき』の構造』の方法論についての問いが「先ず我々如何なる方法によって「いき」の構造を闡明し、「いき」の存在を把握することが出来るであろうか。」^③と問い換えられ、「意味の存在問題」が議論の俎上に載せられる。九鬼は「我々に直接に与えられているものは「我々」である。また我々の総合と考えられる「民族」である。^④として、直接与件に「我々」／「民族」の共同体を据える。そして、民族にとって核心的な存在様態は「意味」として現れ、「言語」として表現されると九鬼は主張する。「意味」そして「言語」は民族の歴史の表現であり、民族の「意識的存在」によって創造されるのである。「いき」は意味を構成していて、言語として成立している。それゆえ「いき」は歴史を担っている「我々」民族の存在様態

の表現である。以上により「いき」の構造を闡明することによって、「我々」の味得さるべき体験を論理的に言表することができる。九鬼は結論する。この「意味の存在問題」への解答を基礎に、文化史的資料に基づいて「いき」の内包的構造、「いき」の外延的構造、「いき」の自然的表現、「いき」の芸術的表現、を分析し、「いき」によって表現された「我々」の「現実」を論理的に言表したのが「いき」の構造である。以下の「いき」の構造の「一 序説」からの引用が端的に九鬼の立場を示している。

即ち「いき」を単に種概念として取扱って、それを包括する類概念の抽象的普遍を向観する「本質直観」を求めてはならない。意味体験としての「いき」の理解は、具体的な、事実的な、特殊な「存在会得」でなくてはならない。我々は「いき」の *essentia* を問う前に、先ず「いき」の *existentia* を問うべきである。一言にして云えば「いき」の研究は「形相的」であってはならない。「解釈的」であるべき筈である。(一、一三—一四)

ここに「体験が表現されたものを理解する」という解釈学の基本枠組みを見て取ることができるだろう。先行研究の指摘するようにハイデガーの影響が確かにある。

次に九鬼の存在論の形成過程を、その準備稿である『いき』の本質⁵、九鬼が参照している田辺元(一八八五—一九六二)の「現象学に於ける新しき転向——ハイデッガーの生の現象

学」(一九二四)⁶の分析を通じて確認したい。

二 「いき」の構造」の形成

——ハイデガー・田辺元・九鬼周造——

『九鬼周造全集』第一巻の解題によると、『九鬼周造全集 第一巻』に収録されている「いき」の本質⁵は数次にわたる推敲を経た準備稿の最終段階のものである。タイトルも当初は「いき」の意義⁵、次に「いき」に就て⁶そして「いき」の本質⁵と変更を重ねていて、九鬼の試行錯誤がうかがわれる。この全集に収録された「いき」の本質⁵は「本質」とは冠しているものの、「本質直観」に批判的な記述も含んでいるので、ただ「本質」の解明に徹しているとは言えない。この混乱は本質を「抽象的で普遍的な概念」と「具体的で個別的な事象の核心的意味」の二つの意味で用いていることが原因である。最終的には本質は前者の意味に取れんし、後者は「いき」の構造⁶では別の語に言い換えられる。「いき」の本質⁵と「いき」の構造⁶は、もちろん両者の間には大きな差異もあるのだが、「本質」の二つの意味に注意しながら読むならば、本論文で問題とする存在論という点においては、その骨組みはおおよそ完成していることがわかる。「いき」の本質⁵の冒頭を見てみよう。

民族の特殊の存在様相は、其民族にとって本質的のものである場合には、一定の「意味」としての客観性を示すも

のである。そして其一定の意味は言語の中媒に由って自己を表現する。それ故に一の具体的意味乃至言語は一民族の過去及び現在の存在様相即ち特殊の文化形象を具有する歴史の自己表明に外ならない。而して意味及言語と民族の意識的存在との関係は前者が集合して後者を形成するのではなくて、民族の生きた存在が意味及言語を創造するのである〔田辺元「現象学に於ける新しき転向」参照〕。(一、八九)

ここで示される議論は先に紹介した『いき』の構造の「意味の存在問題」とほとんど同じである。前述の通り『いき』の構造では「本質的」が「核心的」と言い換えられているが、この「本質」は「具体的で個別的な事象の核心的意味」であるから、この言い換えは存在論の仕組みに影響を与えてはいない。九鬼は「『いき』の本質」を一九二六年一月にパリで書き上げているので、ハイデガーが一九二七年に『存在と時間』を出版する以前であり、九鬼がハイデガーから哲学を学ぶ以前である。当時の九鬼はハイデガーのことは既に知っていたようだが、後年のようにその哲学に精通しているわけではなかっただろう。『いき』の構造の『哲学的基礎は「存在と時間」が出版されるよりも前、それどころか九鬼がハイデガーから哲学を学ぶ以前に、おおむね形成されていると言える。ではなぜ私たちは『いき』の構造』にハイデガーの影響を見て取ることができるのか。

注目すべきは田辺元の「現象学に於ける新しき転向——ハイ

デッガーの生の現象学——」への参照が指示されていることである。この論文はドイツに留学してハイデガーの一九二三年夏学期講義「オントロギー(事実性の解釈学)」を受講した田辺が、ハイデガーの哲学を現象学の新展開として紹介したものである。この論文によって田辺はハイデガーを日本に初めて紹介したのであるが、それはただハイデガーの思想を紹介したというわけではなく、そこには田辺流のハイデガー理解と、その新しさを際立たせるための工夫が織り込まれている。

田辺はハイデガーを新カント派とフッサール現象学を批判的に継承する哲学者として紹介する。まずリッケルトに代表される「先験形式主義」の新カント派の哲学はその超越論的な性格ゆえに「現実」を捉えることができず、「生の哲学」への欲求を満たすことができないものであると評価する。一方のフッサール現象学に関しては、新カント派と比べると具体性を捉えるという点において優れているが、対象に対する主体の関わり方を度外視して可能的にあらゆる意識に普遍な本質を論じるため、具体的な生活を捉える「生の哲学」とするには不十分であり、そして意識を固定された対象とみなしているために意識が対象と関わるることによって発展していくその動的性格を捉えていない、と評価する。そしてこのフッサール現象学を乗り越える人物として田辺はハイデガーを紹介する。ハイデガーは可能的なあらゆる意識の本質ではなく、現実存在する事実と関わる意識を把握する現象学を「事実性の解釈学」として提唱する。こ

の現実存在 (Dasein)⁹⁾ と関わる意識は主観と対象の閉じた関係で成立するのではなく、現実存在は公共圏を持ち、それを通じて諸主観は相互に意識を共有する。この現実存在の公共圏における具体的な表現を解釈するハイデガーの現象学こそが最も具体的な学としての哲学であり、フッサールの問題点を克服し、我々の現実を捉える「生の哲学」であると田辺は評価する。

九鬼が「いき」の本質」と「いき」の構造」で行っていることは現実存在の公共圏における具体的な表現として「いき」を認め、分析することである。それゆえ「いき」の本質」は本質という語の使用に混乱こそあるものの、田辺論文の影響によって「事実性の解釈学」へと転向しつつある段階の草稿と見ることが出来る。九鬼はハイデガーの「事実性の解釈学」を受けて執筆された田辺元の「現象学に於ける新しき転向」に影響を受けていて、それゆえに普遍的な形相の本質直観を試みる立場を批判し、具体的な事実の分析による現実の理解を試みる事実性の解釈学を「いき」の構造」の哲学的基礎としている。

三 「構造」の存在論―紛れ込む「本質」―

このように九鬼は抽象的な概念を本質直観するのではなく、具体的な事実を解釈して理解すべきであると主張している。それはつまり、その現象の「構造」を闡明にするということであった。ではその「構造」の存在論的な位置づけは何か。まずは九鬼に最も影響を与えた田邊論文における「構造」の使用法を

確認してみよう。

意識の一般的本質は志向性にある。今意識の或種的作用、又は諸種の作用の相結合して成立せしめる志向の本質的構造を明にするには、一定の時一定の対象に制約せられた事実性を想像に由って自由に変更し、可能の立場に於て普遍なる本質を觀照すべきであるというのがフッサールの立場である。¹⁰⁾

実は田辺は「現象学に於ける新しき転向」において「構造」を主にフッサール現象学の説明に用いている。これは前記の引用に限定されたものではなく、「現象学に於ける新しき転向」のほとんどの用例において同様で、ハイデガーの解釈学的現象学の説明に「構造」の語を用いることはない。田辺は可能的にあらゆる意識に普遍的な本質の組み立てという意味で「構造」を用いている。¹¹⁾そして実は、九鬼においても「構造」は「本質の構造」という意味であることを示す記述がある。ただし、「いき」の構造」ではなく、一九三七年に発表された「風流に関する一考察」においてである。

語原から言うと風声品流の能く一世を擅にするのを風流というのだということであるが、そういう来歴は別として、風流の本質構造には「風の流れ」といったところがある。

(四、六〇、傍線引用者)

(原文ママ)

風流の産む美的価値の本質的構造は三組の対立関係に還元される。(四、六九、傍線引用者)

「風流に関する一考察」と『いき』の構造』の出版の間には七年の開きがある。しかし両者の分析方法はほとんど同じである。それゆえ『いき』の構造』で明らかにされた「構造」も「本質構造」であると、少なくとも一九三七年の九鬼は認めるだろうし、私たちもそのように読み解くしかない。九鬼は公共圏において成立している民族に共有された意識現象の本質の組み立てという意味で「構造」を用いている。これは退けたはずの類的な抽象的普遍であるところの概念としての「本質」の密かな導入である。そしてこの問題に、『いき』の構造』を執筆する九鬼も完全に無自覚であったわけではない。

「いき」は個々の概念契機に分析することは出来るが、逆に、分析された個々の概念契機をもって「いき」の存在を構成することは出来ない。「媚態」といい、「意気地」といい、「諦め」といい、これらの概念は「いき」の部分ではなくて契機に過ぎない。それ故に概念的契機の集合としての「いき」と、意味体験としての「いき」との間には、越えることの出来ない間隙がある。換言すれば、「いき」の論理的言表の潜勢性と現勢性との間には截然たる区別がある。我々が分析によって得た幾つかの抽象的概念契機を結合して「いき」の存在を構成し得るように考えるのは、既に意味体験としての「いき」をもっているからである。

(一)、七三—一七四)

九鬼には学問は論理的言表、つまりロゴスの領分であるという

信念がある。それゆえに概念としての本質を「構造」に託して密かに導入せざるをえなかった。具体的な事実の解釈は、その意味体験の構造を明らかにするが、それは諸事実を抽象した概念に分析することではなく、学問がロゴスの領分にある限り、具体的な体験の十全な記述には届かない。これが『いき』の構造』で示された結論であった。それゆえ『いき』の構造』はロゴスの学問と具体的な生きた哲学の間で引き裂かれていると評価するべきであろう。

四 九鬼周造の「生の哲学」

—『いき』の構造』から偶然性の哲学へ—

九鬼は「風流に関する一考察」では「本質構造」と明記している。そして筆者には「風流に関する一考察」の九鬼がそれを問題であると考えているようには見えない。この『いき』の構造』との違いは何なのか。鍵となるのは両者の間の七年で九鬼が偶然性の研究を大きく進展させていることである。

『いき』の構造』で九鬼は、体験を言語化して表現し、概念として分析しようとした。その際には分析からこぼれ落ちる個別のな具体があった。九鬼はこの普遍性を持ちえない個々の事象の掘り上げを、偶然性論の課題とした。その時にはナイーブに「我々」が自明な直接与件として論じられることはない。『偶然性の問題』における議論の起点は個人の「我」となり、民族の文化よりもむしろ、個人の出来事に着目するようになる。し

かしこれが直ちに概念の否定につながることはない。それは風流の本質構造を分析する「風流に関する一考察」が執筆されたということからも明らかである。九鬼が模索するのは個物の此性を殺さずに動的な概念を形成する方法である。

ここで注目すべきは偶然性をめぐる議論を通じて九鬼が具体的な個物の存在論的強度を下げたことである。以下は「いき」の本質」からの引用である。

然しながら個人の特殊の体験と同様に、民族の特殊の体験はそれが具体的概念の中に実体化されて居る場合にも概念の分析に由つては残余なき迄完全に把握されるものではない。分析に由つて完全に把握され得るものは *eidōs* である。体験の本質を *oütiā* と見る場合にそれは直観に由つてのみ十全に目撃されるものである。逆説のようではあるが直観に由つてのみ本質を把握される概念があることを認めなければならぬ [E. Husserl, *Ideation, aus den Versuchungen über „Phänomenologische Psychologie“, 1925, S.23*]. (17—18—19)

「いき」の本質」と『いき』の構造」では具体的な体験が核心的意味としての本質を持っている。つまり具体的な体験はそれ自身のうちに十分な根拠を持った必然的存在である。そして偶然性論においては個々の事象は、それ自身のうちには十分な根拠を持たない偶然的存在に位置付けられる。これは九鬼の哲学にとって大きな変更である。個体に核心的意味を認めるので

あれば、その個物は強い存在者であり、概念化によって掬い上げられなかつたとしても、その価値を十分に認められる。それゆえ概念から取りこぼされても、その意味体験は認められる。一方個物に本質がないのだとすれば、それは儂く壊れ去り、忘却されるしかない⁽¹²⁾。それを維持するには概念化等によって必然性へと向かうしかない。九鬼の偶然性論のオリジナリティーの一つは個物の脆さを正視したところにある。九鬼は脆く壊れやすい偶然性を思考の対象とし、「無の深淵の上に壊れ易い仮小屋を建てて住んでいる人間たち」⁽¹³⁾の実存について論じた。それゆえ偶然的な個物の脆さと、それを固定・普遍化し、承らえさせる必然性の両方の意義を知ることとなる。孤立した個体はロスによって概念や本質を仮構することによって、仮初めの普遍性を得て外部とのつながりを結んでいく。九鬼は個体、あるいは偶然性の優位を断固として主張するが、その上で可塑的な必然性を形成する必要も認める。『偶然性の哲学』で偶然性のある方を論じた先に「邂逅」が提示される理由はここにある。

結論—構造を闡明し、存在を把握する—

第一節では九鬼が「具体的な体験」を捉えるために、「我々」の核心的意味が言語によって表現されたものである「いき」を分析するという『いき』の構造」の最も基本的な存在論を確認した。

第二節では九鬼がハイデガーの「事実性の解釈学」を田辺が

紹介した論文「現象学に於ける新しき転向」を基礎にしていることを確認した。そのため本質直観ではなく、具体的な体験を明らかにする「事実性の解釈学」が存在論として掲げられていることが示された。

第三節では「構造」という語が実は「本質」と結びついていくこと、そして九鬼自身も「風流に関する一考察」では「本質構造」と記していることから、「構造」は退けたはずの本質を再度導入する語であることが明らかになった。「いき」の構造は彼自身が目標に掲げた具体的な体験の十全な記述には達していなかった。

第四節では「風流に関する一考察」で九鬼は本質構造に特に否定的ではないことに着目し、「いき」の構造以降の九鬼の存在論の変化からそれを説明した。ポイントとなるのは具体的な事象の位置づけを「核心的な意味を持つ」必然的な存在ではなく、それ自身のうちには十分な根拠を持たない偶然的な存在へと変更した点にあった。そして事象の脆さを正視することによって個物を普遍化し、永らえさせる概念の意義が認められるようになった。

結局のところ私たちは「いき」の構造のどこに惹き付けられているのだろうか。「いき」の構造は豊富な具体例と鮮やかな概念分析によって織りなされたテキストである。最終的には概念に収束するが、しかしその手前には具体例が豊富に並べられている。それらを統べていく九鬼はまさに孤立した出来

事同士を選好させているのである。これは文化史研究の一つの型であり、言い換えれば人々の共通理解となるプラットフォームとしての公共圏の解明である。「いき」の構造は文化史研究の成果としては古典でこそあれ、やはり新しい研究によって更新された部分もあるし、存在論としても無の深淵を露にする偶然性論の深みには及ばない。しかしそれは個をまとめ、プラットフォームを提示する、その鮮やかな筆さばきでもって、私たちを魅せ続けるのである。

九鬼周造のテキストは全集から引用した。

九鬼周造『九鬼周造全集』岩波書店、一九八〇—一九八二年。

引用に付した記号は(巻数、頁数)を示す。例えば(一、三)は第一巻の三頁を指す。旧字体、旧仮名遣いは適宜改めている。

(1) 土井健郎『甘え』の構造』弘文堂、一九七二年。

(2) 高田珠樹『いき』の構造』のヨーロッパ』大阪外国語大学学報』文化編第六五号、大阪外国語大学、一九八四年、二九—五七頁。

藤田正勝『解説—いき』の構造』をめぐって』九鬼周造(全注釈)。

藤田正勝『いき』の構造』講談社、二〇〇三年、一六九—一八七頁。

藤田正勝『九鬼周造…理知と情熱のはざまに立つ〈ことば〉の哲学』講談社、二〇一六年、六五—一〇四頁。

松本直樹『運動の享受—九鬼周造『いき』の構造』における恋愛論』

『宗教学研究室紀要』第六号、京都大学文学研究科宗教学専修、二〇〇九年、二四—五三頁。

山本與志隆『九鬼周造の思想形成への現象学の関わり—愛媛大学法

文学部論集人文学科編』第二八号、愛媛大学法文学部、二〇一〇年、

一八五—二〇二頁など。

(3) (一、七)

(4) (一、七—八)

(5) 田辺元『田邊元全集 第四卷』筑摩書房、一九六三年、一七一—三四頁。

(6) 「本質」の用法の混乱は「いき」の構造（「思想」掲載稿）にも残っており、出版された決定稿『いき』の構造」においてようやく抽象的普遍の意味に限定される。紙幅の都合上「思想」掲載稿は本文では取り上げなかったが、「思想」掲載稿における「本質」の用法の混乱は本論文の議論を補強する。

(7) Heidegger, Martin, *Ontologie: (Hermeneutik der Faktizität) Gesamtausgabe, Abt. 2: Vorlesungen 1919-1944, Bd. 63, Frankfurt am Main: V. Klostermann, 1988.*

（邦訳：マルティン・ハイデッガー、篠憲二、エルマー・ヴァインマヤー、エベリン・ラフナー訳『オントロギー（事実性の解釈学）・ハイデッガー全集第二部門講義（一九一九—一九四四）第六三卷』創文社、一九九二年）

(8) 田辺は新カント派からフッサールを経てハイデガーへと継承、発展していく哲学史観を前提にしている。それゆえ田辺論文にはハイデガーの講義にはない新カント派とフッサールへの過剰な批判が大量に含まれている。それは九鬼にも引き継がれ、過剰なフッサールの本質直観批判となっている。

(9) 田辺自身の訳語に従っている。当時の田邊がこの訳語を選択したことは、適切なことであろう。

(10) 田辺、同書、二八頁、傍線引用者。

(11) 「現象学に於ける新しき転向」の一年後に執筆された「ラスクの論理」（田辺、同書、一四一—一六〇頁）では新カント派で「哲学の論理」を追究したエミール・ラスク（一八七五—一九一五）の哲学を論じる際に頻繁に「論理的構造」の語を用いている。これはラスクの哲学の研究に欠かせない語だったからであるが、田辺にとって「構造」の語は特に誰かに固有の語ではなかったと思われる。

(12) 両者の違いの原因として、取り上げる主題の時間的性格の差異を

指摘しておきたい。「いき」の構造」が主に論じているのは文化史に裏打ちされた「いき」、つまりは「既にあったもの」である。一方の偶然性論で主に論じられているのは、現在のとりとめのない現実である。資料が残りに文化史的価値を認められた過去と、すぐに忘れられてしまう現在の現実とではその存在の性格に違いがある。

(13) (五、一七〇)

(14) 中野三敏「すい・つう・いき——その生成の過程」相良亨・尾藤正英・秋山虔編『講座 日本思想 第五卷』東京大学出版会、一九八四年、一〇九—一四一頁。

井上泰至『恋愛小説の誕生 ロマンズ・消費・いき』笠間書院、二〇〇九年、一四七—一七六頁。

尼ヶ崎彬『いきと風流——日本人の生き方と生活の美学』大修館書店、二〇一七年、二〇七—二七二頁、等参照のこと。

（おだ・かずあき、近代日本哲学、
大阪大学大学院博士後期課程）